装化疾風シルファリオン

Mark-V

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

装化疾風シルファリオン

【Ｎコード】

Ｎ３０６６Ｅ

【作者名】

Ｍａｒｋ－Ｖ

【あらすじ】

終戦間際、三度目の核が東京を焼いたことで、日本には＜装化能力者＞と呼ばれる異能が溢れることになった。そして現代、＜装化能力者＞の暴走や犯罪を止めるための＜装化能力者＞――通称”ヒーロー”を養成する学園に、いまだ変身できない落ちこぼれの少年がいた。そんな彼が一人の少女と出会った時、新たなヒーローが生まれる。

序章

いつの出来事だったのかは、よく思い出せない。小学校か、あるいは幼稚園に通っていた時のことだとは思うが……どちらだったろうか。

さらに言うなら、場所についてもおぼろげな記憶しかない。近所の公園だった気もするし、そうでない気もするのだ。

ただ――

幼い頃にそういうことがあった、という事実だけは、やけにはっきりと覚えている。

「ねぇ、名前はどうするの？　もう決めちゃった？」

話の途中、ふと思いついたかのように幼い少女がそう尋ねた。小学生になるかならないかの年頃で、身体中から元気が溢れている印象の、まるで菜の花畑みたいな女の子だった。彼女は満面の笑みを花開かせて、尋ねた相手の顔を正面から真っ直ぐに見つめている。

「名前？　んーと……まだ、決めてない」

答えたのは、少女に比べるとちょっとだけ気弱そうな、優しい顔立ちの少年だった。彼は、ほんの数ヶ月ぶん少女よりもお兄さんで、唯一そこだけは断固ゆずらないものの、おおむね外見通りの性格である。だから、なにをする時でも、主導権はどちらかといえば少女にあった。彼女の唐突な問いにもまったく戸惑わない、少年の落ち着いた態度は、つまり彼がそういうことに慣れているせいだった。

将来どんな”ヒーロー”になりたいか――二人が話しているのは、そんな夢物語りだ。

ヒーローたちの華々しい活躍は毎日あちこちのニュース番組で取りあげられていて、だから子供たちは誰もが彼らに夢中だった。それはもちろん二人も例外ではなく、大人になったら、少年はヒーローになり少女はその手伝いをするのだと、以前から二人で決めてい

た。
　実際のところ、ヒーローになれるのは一握りの人間だけである。しかし、少女は目の前の少年がヒーローになって活躍する未来を心から信じていたし、少年自身も、頑張ればいつかきっとヒーローになれるはずだと思っていた。まだ幼い二人にとって、そのことは”夢”でもなんでもなく、必ずやってくる”明日”なのだった。
　二人だけの、未来のヒーロー。その名前がまだ決まっていないと知って、元気な少女はますます表情を輝かせる。
「そっか、決まってないんだ。よかったぁ――だったら、わたしが考えてあげる！」
「えっ？　う、うん……」
　一点の曇りもない少女の笑顔につられて、少年は思わず頷いた。本当は自分で考えたかったのだが、こうなってしまうと断れない。いつものことだった。
「んー、えっとねぇ――＜愛天使＞プリティポニーは？」
「や……やだよ、そんなの！　女の子じゃないんだから、もっとカッコイイやつがいいよ！」
「ええー？　そぅお？　イヤなの？　ならね……＜暗黒将軍＞ブラッディジェノサイドとか」
「ヒーローなのにっ？　もっとだめだよ！　さっきのやつよりはカッコイイけど、なんか悪役みたいだ！」
「そうかなぁ？　じゃあねじゃあね……」
　思いついた名前を、少女が次々と口にしていく。そのひとつひとつに、少年は困った顔をしながら悲鳴をあげたり首をぶんぶんと横に振ったりする。
　しばらくの間、そんなふうにじゃれ合うようなやり取りが続き――
　やがて少女は不機嫌そうに頬を膨らませた。
「もうっ、さっきから文句ばっかり！」
「そんなこと言ったって……」
　さすがの少年も今回だけはゆずらなかった。なにせ自分がヒーロ

ーになった時の大事な名前である。できるだけカッコイイ名前がいい。
「せっかく考えてあげてるのに……ええと、もっと強そうで悪役っぽくない名前がいいんだよね？」
少女は可愛らしく眉根をよせて少しだけ考え込んでから――まるで不意打ちのように”その名前”をぽつりと口にした。
途端に少年が目を丸くする。
「あ……それは、カッコイイかも」
気がつけば、少年は独り言のようにそう呟いていた。それまでのやり取りはなんだったのかと自分でも不思議になるくらい、あまりにもすんなりとその名前を受け入れていた。
女の子っぽくないし悪者っぽくもないし――なにより、とてもヒーローっぽい名前であるような気がしたのだ。
「ホントっ？　気に入った？」
「うん」
「じゃ、これに決まり！　……決めてあげたんだから、ちゃんとお礼しなきゃだめだからね？」
「う、ん……ええっ？」
危うく返事をしそうになってから、少年は裏返った声で驚いた。自分から頼んだわけでもないのにお礼をしろと言われるなんて思いもよらなかった。……それでも嫌とは言えないのだけど。
「お礼って、なにすればいいの？」
「あー、んと……それはぁ……」
あきらめの心境で少年が聞くと、少女は急にもじもじと言葉をつまらせた。心なしか顔が赤くなったようにも見える。
「あのね……ひとつだけ、お願いがあるんだけど……」
なんだろう？　少年は冷や汗を流さんばかりに緊張する。なぜなら、少女に今みたいな表情をされると、いつも以上に彼女の言いなりになってしまう、という自覚があるからだった。そのせいで、これまで何度もひどい目にあっている。

しかし、少女の”お願い”はいつもと感じが違っていた。
「ん、んとね……ヒーローになったら、わたしを助けてくれる？」
耳に届いた意外すぎる言葉に、少年はきょとんとしてしまう。なんと答えればいいのかわからず、呆然と少女のことを眺める。
そんな反応を返されて、少女はすぐに顔を伏せた。
「だ、だからね！　……わたしがピンチになったら、助けて欲しいな、って」
なぜわざわざそんなことをお願いするんだろうと、少年は内心で首を傾げた。自分がヒーローになった時、彼女はその相棒になっているはずなのだから、彼女のピンチに駆けつけるなんて当たり前のことだ。だってヒーローは皆そうするじゃないか。
まだ幼い少年は、少女の”お願い”の意味に気づかない。――けれど、気づいていてもいなくても答えは決まっていた。
「わかった。絶対に助けにいく」
その瞬間、少女は弾けるように顔をあげた。しかし、口をパクパクとさせるばかりで、結局なにも言うことができず、最後には、またうつむいてしまう。
次に聞こえたのは、本当に彼女の声かと疑いたくなるような、かぼそくて、どこか臆病な囁きだった。
「……約束する？」
「うん、するよ」
少年がふたたび頷くと、少女はようやく首を持ちあげて――薔薇色の頬で嬉しそうに笑った。

◆◇◆

幼い頃にそういうことがあった、という事実だけは、やけにはっきりと覚えている。
しかし、言ってみればただそれだけだ。覚えていようがいまいが、もはや意味はない。明るく元気で純粋で、誰よりも少年のことを信

じていたあの少女は、もうどこにもいないのだから。
過ぎ去った優しい日々の思い出に耽るのは、やめにしよう。少なくとも今はその時ではない。

今はまず――目の前にいる男を”処理”してしまわなければ。

場所は荒れ果てた雑居ビルの一室、時刻はすでに深夜と言ってもいい頃合いだった。大通りにあるまともな建物はいまだ煌々と光を放っているが、都市開発から見捨てられて廃墟となった雑居ビルに照明などあるわけもない。目の頼りになるのは壊れた窓から入り込んでくる街の明かりだけで、室内は、わずか数歩先すらぼんやりとしか見通せない暗闇に沈んでいる。
そこに、ふたつの人影があった。
”ヒトのカタチをしたもの”なら、他にもいくつか床に転がっていたが――それらは、もう生命活動を停止している。人影と呼ぶにはあまりにも手遅れだ。死が積みあげられた廃墟の中、生きて動いているのは、恐怖に顔を引きつらせた一人の若い男と、その正面に立っている漆黒の人影のみだった。
「や、やめっ……やめてくれっ！　お前、ヒーローなんだろ！？　ヒーローのくせにこんなっ、こんなこと……お前だってただじゃすまねぇぞ！」
後ずさりながら聞くに堪えない戯言を撒き散らす男に、黒い人影は無言のまま一歩近づいた。強固な＜鎧装＞に覆われた足が、ひび割れたコンクリートの床を踏み締め、ジャリッ、と耳障りな音を立てる。
「ひっ――こっちにくるな、くるなよっ！　オレ、誰にも言わないからっ……！」
誰にも言わない？　だからなんだというのだろう。
まさか。まさかまさか。何人もの少女をこの場所に連れ込んでは薬漬けにして無理矢理に犯してきた最低最悪の人でなしが、まさか

命乞いをしようとでもいうのか？
男がいくら言葉を重ねても、黒い人影は答えない。ただ静かに一歩ずつ距離を縮めていく。
けれど、静かなのは表面だけだ。鋼鉄のように固くて冷たい＜鎧装＞の内側では、煮え滾った感情が嵐となり荒れ狂っている。――許すつもりなど一切なかった。犠牲となった少女たちの中には、自分から命を絶ってしまった者もいるのだ。お前もそうなるのが道理だろう。
男を壁際まで追いつめると、黒い人影は無造作に右手を伸ばした。悪魔の手を思わせる鋭い五指で男の首をつかみ、ゆっくりと焦らすように腕を持ちあげていく。人間の範疇を超えた膂力で、そのまま苦もなく男を宙吊りにする。
「あ、くは、ぁっ……たす、助け、て……！」
男は手を振りほどこうと必死にもがきながら、空中で足をばたつかせた。同時に、潰れかけた喉から、救いを求める哀願が幾度も幾度も繰り返される。
だが、黒い人影は拘束を緩めるどころか、より一層、その手に力を込めた。
タスケテ――お前らが踏み躙った少女たちも、同じことを言わなかったか？
指がぎしりと男の喉に食い込んだ。男は顔中から薄汚い体液を溢れさせ、誰にも届かない無意味な悲鳴をあげながら、死の恐怖に表情を歪める。この世のものとは思えない、まさに地獄のような顔だった。
けれど、いくら泣き叫んだところで助けはこない。そういう場所を選んだのは彼ら自身なのだ。――さあ、自分の罪に殺されろ。
「ぎ、ぃ……あ、がっ……――！」
最後に骨の砕ける嫌な音がして、男はようやく身勝手な雑音を止めた。瞳があらぬ方向を向いたまま光を失い、四肢はだらりと脱力する。

黒い人影は、男が完全に動かなくなったのを見届けると、その抜け殻を放り投げた。
一方的な殺戮が終りを告げ、廃墟にふさわしい静寂が戻ってくる。暗闇に残されたのは濃厚な死の気配だけだ。折り重なった死者たちの中に平然と立っている漆黒の影は、まるで墓標かもしくは死神のようだった。
――お前、ヒーローなんだろ！？
男が叫んだ的外れな言葉を頭の片隅に思い浮かべながら、黒い人影は周囲を確認する。＜鎧装＞の恩恵で普段よりも鋭敏になっている五感を使い、生きている者がいないかどうかを慎重に探った。
全員、間違いなく死んでいる。
後悔など微塵も感じなかったが――こんなものはヒーローの所業ではない、という自覚くらいはある。これはただの復讐にすぎないのだと、誰よりもわかっている。
自分はヒーローになれなかった。つまりそういうことだろう。
そう結論づけると、黒い人影は近くの壊れた窓に足をかけ、全身に力を溜め込み――
次の瞬間、大きく跳躍して夜の街に身を躍らせた。

この惨劇が世間の知るところとなったのは、事件発生の夜から数えて三日後のことだった。
犯人はまだわかっていない。

序章（後書き）

完成したらどこかの賞にでも送ってみようか……

実力が云々はとりあえず知らん顔です。挑戦って大事ですよね。

第一章：　落ちこぼれのヒーロー　―１―

気がつくと、金属質の赤い＜鎧装＞を纏った拳がすぐ目の前にあった。

反応の遅れを悔やむよりも先に、左右の腕を交差させて顔面をかばう――その瞬間、とんでもない衝撃が走り抜け、両腕の骨がみしりと鳴った。

拳を受けると同時、打撃を殺すために上体を引いたが、ほとんど意味をなさない。痛みだけでなく、まるで冗談のような浮遊感が身体を襲い、防御姿勢のまま後ろに吹っ飛ばされた。格闘技場の冷たい空気が背中にぶつかり、身につけている学園指定のトレーニングウェアがはためく。

抵抗するのが馬鹿らしくなるほどの、圧倒的な力の差だった。間一髪、自分から後ろに跳んでいたおかげで骨は無事だったものの、たった一撃で、もう肘から先の感覚が曖昧になっている。

腕の痛みを堪えながら着地をどうにか成功させ、仰向けに倒れる無様だけは避けた。――しかし、息をつく間もなく、相手が真っ直ぐに距離を詰めてくる。

己の優位を確信しているからこそできる単調な攻めだ。能力差を盾に、速攻で畳みかけるつもりだろうが、あまりにも動きが雑すぎた。直進するだけの相手ならば、いくら能力差があろうと対応はできる。

注意を限界まで引きつけ、相手の死角となる位置に身体を滑り込ませた。＜鎧装＞による打撃を、生身でそう何度も受けるわけにはいかない。できるだけかわすことが大前提であり、正面から打ち合えない以上は、体捌きで引っかき回してやるのが唯一の対抗手段なのだ。

当然、相手はこちらの動きを追いかけ、身体ごと振り向いたが、その視界に捉えられるよりも先にふたたび格闘技場の床を蹴り、必

死で死角を押さえる。
すると目標を見失った相手が戸惑いの気配を滲ませた。わずかに脇が甘くなり、足運びもほんの一瞬ためらう。
待ちに待った決定的な隙が、そこにあった。
思考を置き去りに、自然と身体が動き始める。大きく前に一歩踏み込み、腰を捻りながら呼吸を爆発させ――無防備な相手の脇腹に、螺旋の軌道で掌を叩きつける。
「ぐっ……！」
赤い＜鎧装＞の向こうから、こもった呻き声が聞こえた。
透った！
痺れた腕にもはっきり伝わる、確かな手応えと――刹那の気の緩み。
そのせいで間合いを離すのが遅れる。
「こっ……の野郎っ！」
激昂した相手が、怒りにまかせて無理な体勢から膝蹴りを放った。
咄嗟に腕を引いて防ぎ、なんとか直撃は避けたが、所詮は焼け石に水である。体勢も距離も無茶苦茶な、素人同然の蹴りなのに、ドンッ、という致命的な音が響いた。全身のばねを使って掌底を打った直後では、先ほどのように衝撃を逃がすこともできない。
「……っ！」
悲鳴すらあげられないまま、あっけなく足から力が抜けた。まるで糸が切れた操り人形のように膝をつく。
そこに容赦ない追撃の蹴りが迫り――
「そこまで！　勝者、武中！」
指導教官の野太い声を合図に、眼前でぴたりと脚が止まった。残された風圧がふわりと前髪を揺らす。
髪がもとの位置に戻るまで、瞬きひとつできなかった。たっぷり数秒経ってから、大怪我をする一歩手前だったことに身体が気づき……今さらながらに、冷や汗が背中を伝っていく。
格下にまさかの一撃を食らった相手はどうやら腹の虫がおさまら

ない様子で、勝負はもう着いたというのに蹴りを止めた姿勢から動かない。
「おい、終りだと言っている！　武中、”装化”を解け！」
いつまでも＜鎧装＞を固着させたままの相手に、格闘術の指導教官である大貫清十郎から声が飛んだ。話によると大貫教官は元ヒーローだそうだが……顔があまりに怖すぎるせいで、むしろ悪の怪人だったのではないか、という噂もある。過去の真実はともかく現在の事実として、そんな大貫教官に逆らえる生徒などこの学園には一人もいない。
いかにも渋々といった雰囲気を漂わせながらではあるが、組み手の相手――クラスメイトの武中が装化を解除する。その全身を覆っていた赤い＜鎧装＞が、表面から徐々に光の粒子となり空気に消えていく。
やがてあらわになったクラスメイトの顔は、予想通りにとんでもなく不機嫌そうだった。大貫教官の隣で組み手を見守っていた、武中のパートナーである支援者養成科の少女も、やはり同様の面持ちである。装化能力者とそのパートナーは一心同体と言ってもいいくらいだから、そういう顔になってしまうのも当然だろうけど……女の子に睨まれるのは、なんだか悲しいやら切ないやら。
大貫教官は不満顔の二人に厳しい表情を向けると、ため息混じりに口を開いた。
「まったく……勝者とは言っても、生身の相手に一発もらっているようじゃ話にならん。武中は格闘術の補習決定だな。基礎からみっちり叩き込んでやる」
教官がそう告げた途端、格闘技場の壁にそって座っている他の生徒たちから、一斉に笑い声があがる。誰もが大貫教官と同じことを思っている、という証拠だった。
火に油とは、まさにこういう状況のことを言うのだろう――思わずため息をつきそうになった。
装化状態における格闘術の授業は、その性質上、常に支援者養成

科クラスとの合同になる。ヒーロー養成科は女子生徒の絶対数が少ないので、そこに在籍する男子生徒からすれば、この授業は女の子にいいところを見せる格好の舞台なのだった。当然、そんなところで恥をかきたいとは誰も思わない。

案の定、笑いの的にされた武中は、悔しそうな顔で上から俺を睨みつける。

「くそっ、こんなやつのせいで……！」

こんなやつ、とはひどい言い草だったが、そう言いたくなる気持ちはわかる。なにせ俺は、二年生になったというのにいまだ”装化”することもままならない、ヒーロー養成科のお荷物だから。

恥以外のなにものでもないが、”ヒーロー養成科の日野原彼方”と言えば、この学園ではけっこうな有名人なのだ。

「文句を言うんじゃない。次はこうならないように鍛え直してやると言ってるんだからな。――おい、日野原っ！　いつまでそこに座ってるつもりだ！」

「あ、はいっ……！」

ついでのように怒鳴りつけられて、俺はふらつきながら立ち上がった。その拍子に身体中のあちこちが悲鳴をあげたけれど、根性でなんとか堪える。

大貫教官は先ほどまでよりもずっと厳しい視線で、俺をひたと見据えた。

「もう何度言ったかわからないがな――装化できないヒーローはこの世にいない。そろそろ支援者養成クラスに転科することも考えておけ」

それはつまり、ヒーローになるのを諦めろ、ということだった。

今のままでは鍛え直すことすら無駄だと、そう言われたようなものだった。

素直に頷けるわけがない。

「いや、でも……」

「わかったら返事をしろ。いいな？」

反論を途中で遮られた俺は、ぐっと黙り込んだ。そのやり取りを見物していた周囲の生徒たちが、馬鹿にするような笑い声を小さく漏らす。――男子生徒も女子生徒も区別なく、くすくすと笑っている。装化することもできないくせに、いつまでもヒーロー養成科にしがみついている滑稽な俺を、誰もが笑っている。

嘲笑の中、抵抗する気力を根こそぎ奪われた俺は、ぎこちなく頷いた。

「……はい」

「よし、それでいい。――さあ、組み手の続きをやるぞ。残りの時間、武中は他の者の組み手をしっかり観察することだ。日野原は終了時間までグラウンドを走っていろ」

どうやら格闘技場からも追い出されるらしい。しかも終了時間まで……って、まだ三十分以上あるんですが。

色々と思うところや言いたいことはあった。けれど、もはや俺のことなど誰も気にしていない。必要な話はもうすんだとばかりに、さっさと次の組み手が始められてしまう。

結局、俺はなにも言えずに、野良犬のような足取りで格闘技場の出口に向かった。

無人の下駄箱でスニーカーに履き替えながら考える。悔しいけれど――大貫教官の判断は正しいのだ。

この授業で学ぶべきは＜鎧装＞を纏った状態での格闘術である。生身の格闘術とはだいぶ違うので、いまだ装化できない俺みたいな人間が観戦しても、あまり参考にはならない。重要なのは、まず装化できるようになることであり、そのために身体を動かす、というのはあながち間違った方法ではなかった。

身体の疲れが極限まで達すると、人間の精神は一種のトランス状態に突入することがある――つまり、長時間の有酸素運動によって、装化の基礎である精神集中状態を作り出せるのだった。そういった行為を何度も繰り返せば、頭ではなく身体がその状態を覚えてしまう。

ちゃんと理にはかなっているわけだ……まあ、本来ならこういうのは一年生のカリキュラムなんだけど。

格闘技場の外に出ると、いきなり初夏の陽射しが降ってきて、俺は反射的に目を細めた。右手を額にかざし、陽光の明るさに慣れるまでじっとする。そうしていると、不意に爽やかな風が吹いて優しく頬を撫でた。なんとも気持ちのいい陽気である。沈んだ心も晴れていくようだ。

やがて瞼をあげると、雲ひとつない青空と誰もいない広大なグラウンドが瞳に映った。

ここは新東京二十四区の高乃原郊外にある、装化能力者のための教育機関――国立高乃原学園である。設立目的からなにから特殊な学園なので生徒数は若干少ないが、敷地の広さや設備のよさは都内でも指折りだ。日本社会を守護する人材の育成に金を惜しんではいられない、ということだろう。

この学園で過ごすのは、今年で二年目になる。常識的に考えると、そろそろ装化くらいはできなければならない時期だった。実際、俺以外のクラスメイトたちは――まだ支援者養成科クラスの生徒からサポートを受けなければならないものの――全員が装化を成功させている。

けれど俺だけは、この学園に入ってからまだ一度も装化に成功したことがない。ようするに重度の落ちこぼれなのだ。ヒーローへの道は、遥か遠いどころか、わずか数歩先であっさり途切れてしまっている。

挫けそうになるのは毎日のことだった。

いつだって逃げ出したくて仕方ない。

それでも――それでもまだ、”あの約束”が心のどこかに残っているから。

まあ、やるしかないんだよな。

たった一人のグラウンドで、初夏の空気を全身に感じながら……俺は気持ちを切り替えると、まずは最初の一歩を踏み出した。

第一章：　落ちこぼれのヒーロー　―１―（後書き）

戦闘シーンにずいぶん手間取り、そのあたりの練習不足に気づいたり。どうにか形にはなったと思うのですが……どうでしょうね……うーん。ま、いいや（晴）。

第一章：　落ちこぼれのヒーロー　―２―

「――では、これで失礼します。明日からよろしくお願いします」

そう言いながら礼儀正しく頭を下げて職員室を出てみると、窓の外はもうすっかり茜色だった。転入という大きな節目を迎えるにあたり美容室でわざわざ毛先を整えた、肩口まである真っ直ぐな黒髪が、夕日の輝きをさらさらと艶やかに反射する。左胸に高乃原学園のエンブレムが縫いつけられた真新しい夏服のシャツも、太股の半ばあたりで裾を揺らすスカートも、すべてが薄っすらとオレンジに彩られる。……ほんの一瞬、まるで廊下の空気そのものが色づいているかのように感じた。

左の手首をくるりと返して腕時計に目をやり、ああ、と納得する。すでに日が落ちるのも無理はない時間である。

まさかこんな時間になってしまうとは思わなかった。残っていたのは簡単な手続きだけだったから――本来の提出期限に間に合わなかった書類を直接届けにきたのだ――すぐに終わるはずだったのだけれど。

原因はわかっている。十七歳になったばかりの自分がこういう事務手続きにまだ不慣れなせいだ。つまりは、提出する書類に記入不備が見つかり一から書き直すはめになった結果が、今のこの状況なのだった。

ほとんど気にもならないくらいの些細な不備だったのに……なんて、ちょっと思ったりはするものの、この高乃原学園が背負っている特殊さや重要さを考慮すれば、多少融通の利かない部分があるのも理解できる。ヒーローとそのパートナーを育成する国立の教育機関に、手違いなどあってはならない。だからこそ、必要以上に規則が優先されることだってあるだろう。

なんにせよ、転入に必要な事前の手続きはすべて終わった。あとは明日を待つばかりだ。肩の荷が下りた心持ちでほっと息をつき、

来客用の出入り口に向かおうとして――
その時、スカートの裾がふわりと広がり、わずかに舞い上がった。
「ゃっ……！」
小さく悲鳴を漏らす。下着が見えるほど舞い上がったわけでもないのに、思わず立ち止まりスカートの前後を手で押さえた。……まわりに合わせるつもりでスカートを短くしてみたはいいけれど、やはりなんだか落ち着かない。ついこの間まで通っていた全寮制の女子校では、スカート丈は膝下が当たり前だったから。
もしかすると加減がわからず、やりすぎているかも知れない。ちょっと不安になりながら改めて自分の姿を見下ろす。エンブレム以外には目立った装飾のない真っ白な半袖シャツに、グレー基調でチェック柄のプリーツスカート――今まではセーラー服しか着たことがなかったのでかなり新鮮だった。意外なくらい着心地が違っていて、落ち着かないのはたぶんそのせいでもある。
どこか変じゃないだろうか？　どうしてもそんなことを考えてしまう。
外見にことさら気を使うつもりはないが、できるなら自分のヒーローとなる人には自分のことを気に入ってもらいたい、というささやかな気持ちも、あるにはあるのだった。そのあたりは、きっと自分以外のパートナー志望者たちも同じだ。
――いや、妙なことを考えていないで、まずは落ち着かないと。
我を失いかけていることに気づいて、深呼吸をしながら窓の外に視線を投げる。そこから見えるのは、驚くほどに広大なグラウンドや、いくつもある格闘技場の建物たち、最先端の機器がそろったトレーニング施設に、装化能力の調査と解明を目的とする研究棟……見慣れない高乃原学園の風景が、薄いガラスの向こうにたたずんでいた。
反対する父親を数年かけて説得してまでこの学園に転入してきたのは、パートナーになると誓った幼い頃の約束を果たすためだ。残念なことに、約束を交わした相手はもう側にいないけれど、それで

も”あの約束”はまだ胸の奥にしっかりと残っている。――なので、転入先にはもちろん支援者養成科を選んだ。明日からは、夢を共有するクラスメイトたちと一緒に、パートナーライセンスの取得を目指すことになる。

資格そのものがまだ存在しなかった戦後の二十数年間はともかく、法律が整備された現代においてパートナーを志すなら、ライセンスの取得が必要不可欠だった。ヒーローにしろパートナーにしろ、活動を認められるのは有資格者のみだからである。

けれど、ライセンスを取得するだけではまだ足りない。パートナーとなるために欠かせない要素が、もうひとつある。

それは自分のヒーローを見つけ出すことだ。

前面で活躍するのはあくまでもヒーローであり、極端な話、パートナーは彼らの支援をする者でしかない。ようするに、ヒーローの隣に立ってこそのパートナーなのだ。たとえるなら太陽の存在なくしては輝けない月のようなもので、ヒーローがいないとそもそもパートナーにはなれないし、さらに言えば、どんなヒーローを選ぶかによって、パートナーの未来はがらりと変わってしまう。――だから、パートナー志望者たちは皆、それこそ人生の伴侶を探すかのように、自分のヒーローを探すのだった。

いや、もしかしたら……ヒーローを探すことは、まさしく伴侶を探すのと同じなのかも知れない。

ヒーローの役割りは＜鎧装＞を纏った戦闘が主で、対するパートナーの役割りは、情報収集や移動手段の手配、装化および戦闘の補助など、数え始めるときりがなかった。言ってみれば、内容を問わず陰に日向にヒーローを支えることこそがパートナーの役割りだ。そのせいか、パートナーはそのまま私生活においてもヒーローのパートナーになる場合がほとんどである。しかも、現在活躍中のヒーローとパートナーは、全体の九割が学生時代に出会っているらしい……なんて記事が、いつだったか月刊『ＨＥＲＯ’ｓ』に載っていた。例外はいくらでもあるだろうが、だからと言って意識せずには

いられない。
そう、私はここで見つけるのだ――運命の出会いを。私のすべてをゆだねられるような、本物のヒーローを。
ついに幼い頃からの夢を叶える時がきた。そのための日々が明日から始まる。そう考えるだけで、大きな期待とわずかな不安がトクントクンと胸を揺さぶった。いつの間にか新しい制服に対する気恥ずかしさは消えて、そのかわりに心を占めたのは、いてもたってもいられないような気持ち……
うん、明日からたくさん頑張ろう。そんな決意も新たに、ふたたび歩き始める。
やがて来客用の玄関にたどり着いたが、胸踊るような高揚感はまだ続いていた。なんだか、このまま帰るのは惜しい気分である。
スリッパから靴に履き替え、校舎の外に出ると――ちょうどいい具合に、日が完全に落ちるまでにはまだ多少の猶予がありそうだった。
どうせ遅くなってしまったのだし、少しだけ学園を探検してみようか。
それはとてもいい思いつきであるように思えた。この間まで通っていた女子校の友人たちにはよく「変わっている」と言われたものだが、もともと”探検”とかそういうことが大好きなのだ。
……なんて考えている間にも足はすでに動いていた。ふと気がつけば、人もまばらな高乃原学園の敷地をまるで弾むように歩いている自分がいて、どうやら悩むまでもなかったらしいと小さく苦笑する。
さて、どこにいってみよう？
自分の中にある子供っぽい願望をいさぎよく認めたその途端、足取りが、もっともっと軽くなった気がした。

◆◇◆

大事なのは呼吸と動作を一致させることだ。師匠からはそう聞かされている。

制服姿のまま、正面にある手作りの巻き藁に向かって構えを取り、俺はまず息を整えた。夕焼けに染めあげられた放課後の学園――その片隅にある広葉樹の林に、静かな呼吸音が広がっていく。

そうしながら、ゆっくりと体内で＜氣＞を練りあげた。

不可視の熱い塊が全身を巡り、四肢に力が満ちる。全身の神経が、細胞のひとつひとつが、より高性能のものに置き換わるような感覚だった。――近年の研究で、＜氣＞を練った時の体内では実際にそういうことが起きているのだと、明らかになっている。その研究結果が正しいとするなら、あながち間違った感覚でもないはずだ。

研究者たちの言葉を借りるなら、＜氣＞とは”存在そのものに根ざす力”である。動物だろうが植物だろうが、あるいは無機物であっても、ただそこにあるだけで万物がこの力を内包している、らしい。

もちろん、力を持っているかどうかと、力をきちんと使えるかどうかは、まったく話が別だった。なんでもそうだが、使いこなすには才能と努力が必要なのだ。誰もが持っているけれど、誰もが扱えるわけではない力――そう表現するのが、たぶん一番わかりやすいだろう。魔力だとか霊力だとか、どう呼ぶかは人により様々だが、俺は師匠の影響でこの力を＜氣＞と呼んでいた。

ヒーローもパートナーも、この力を操って己の身体能力を強化する。使っているのは同一の力にすぎず、そこに区別はない。二者をわけるのは＜鎧装＞を形作ることができるか否かの一点のみだった。つまりは装化能力の有無こそが大きな差を生むのだ。

俺がやっているこの行為は、まさにただの”強化”である。人間の身体にそなわっている機能を十全に引き出すため、＜氣＞であちこちを補強しているだけだ。車を改造してカタログスペック以上の性能を出そうとするのに似ているかも知れない。装化能力をそもそも持っていないパートナーたちや、能力を使いこなせない俺みたい

な未熟者にできるのは、ここまでだった。――この限界を突破する道はただひとつ。装化能力を発現させる以外にない。

装化とは、今ある身体を補強するのではなく、破格の性能を持った強靭な身体を新たに作り出すことだ。装化能力により作り出される、人間を超えるための身体――それが＜鎧装＞なのである。だから、生身の俺が組み手で負けたのは当然の結果と言えた。ただの改造車がスピードレース用のマシンに挑むようなもので、正面から戦って勝てるわけがない。まがりなりにも有効打があった上に大きな怪我はないのだから、むしろ褒められてもいいくらいだ。

しかし、肝心の装化ができないのでは、ヒーロー養成科の生徒として失格であることには変わりがない。いくらヒーローでも四六時中＜鎧装＞を纏っているわけではないので、生身を鍛えることにだってちゃんと意味はあるけれど……どんなに生身を鍛えても、ヒーローにはなれないのだ。

わかっている。そんなことはわかっているが。

だからといって、なにもせずにはいられなかった。

自分の夢を叶えるまでは、”あの約束”を果たすまでは、立ち止まらないと決めている。

ヒーローやパートナーになろうとする人間の大半は、そういう約束を胸に抱えているもので、探せば似たような話がいくらでも転がっているだろう。

でも、そのありふれた記憶が自分を支えていることは確かだから――今はただ、一歩ずつ前に進むだけだ。余計なことを考えるのは、練習が終わってからにしよう。

雑念を振り払い、視線の先にある巻き藁に集中する。

この巻き藁は、わざわざ自分で作り、学園の許可を取ってここに置いたものだ。高乃原学園では力の優劣によって生徒の上下関係が決まるため、落ちこぼれである俺には、トレーニング施設を使用する機会がなかなかまわってこない。手作りの巻き藁は、そんな俺のささやかな抵抗であり、自分はまだ夢をあきらめていない、という

決意の証でもあった。
俺は、自分の中にある想いを確かめるためにも、毎日こうして放課後の一時間を練習に使っている。いつか夢に届くと信じて、一日も欠かさずに続けてきた。――そのおかげで必要な動作はもはや身体が覚えている。集中したあとのことは無意識に任せればいい。
深呼吸を繰り返して、精神を鋭い刃のように研ぎ澄ます。思考が真っ白になり、＜氣＞の循環が一気に加速する。
やがて体内の＜氣＞が臨界点に到達すると同時、身体が動いた。
「ふっ……！」
一瞬の踏み込み、爆発呼吸、淀みのない＜氣＞の流れ――なにもかも完璧な、会心の一撃が放たれる。

背後から声をかけられたのは、まさにその時だった。

「ああ、いたいた。やっぱりここだったんだ」
「え？」
突然のことに驚き、完璧だったはずの掌底打がわずかに揺らぐ。螺旋の軌道が目標の中心から外れる。
空気を裂きながら繰り出された掌が、そのままの勢いで巻き藁の端を叩いた次の瞬間――
手首が変な方向に曲がり、ぐきっ、と嫌な音が響いた。
「おわあああっ！？　い、痛ぇっ！　手首がっ、手首が凄いことにっ！」
「……なにやってんの？」
痛みに悲鳴をあげる俺の様子を不思議そうな顔で眺めながら、制服姿の男子生徒――御鷹悠人はぽつりと呟いた。
「なにもかもお前のせいだっ！　いきなり声かけるなよもう……！」
「あはは、もしかして練習中だった？　ごめんごめん」
この学園唯一の友人である悠人は、なんとも軽い調子で謝ると、ひらひら手を振った。

あんまり誠意が感じられないぞ、おい。
思わず悔しくなるくらいに整った悠人の顔を涙目で睨み、そんなことを考える。
「んで、なにしにきたんだよ」
「そんなに怒らなくてもいいでしょ。わざわざ今月の『ＨＥＲＯ'ｓ』持ってきたんだから、むしろお礼のひとつくらいあってもいいんじゃない？」
『ＨＥＲＯ'ｓ』は、その名の通りにヒーロー専門の情報誌である。カラーページをふんだんに使っているせいか、けっこう値が張るので、悠人と二人、月ごとに交代で買っている。金のない学生の涙ぐましい知恵だった。
「ああ、そっか。発売日、今日だったっけ――今月の表紙、誰だった？　特集なに？」
手首の痛みも忘れて矢継ぎ早にそう尋ねると、悠人は苦笑しつつ鞄から雑誌を取り出した。
「僕に聞かないで自分で読めば？　そろそろ休憩ってことでさ。ちなみに表紙とグラビアは彼方の好きな＜氷姫＞スノウリアで――特集は＜獅子王拳＞ブレイズレオだったよ。全二十ページの大特集。さすが現代最強のヒーローは記事も派手だね」
「へぇ、今月は豪華だなー。＜氷姫＞と＜獅子王拳＞か……って、スノウリアが好きなのはお前だろ」
雑誌を受け取ったところで、ようやく言われたことの違和感に気づき、とりあえず訂正しておく。
＜氷姫＞スノウリアは、数少ない女性の装化能力者である。どこか冷たい雰囲気を漂わせる美貌の持ち主でありながら、養成学園で学ぶことなくライセンスを取得したという天才でもあり、最強の名を冠する＜獅子王拳＞には及ばないものの最近かなりの注目を集めていた。俺たちと同い年のはずだが、とてもそうは思えない活躍ぶりだ。
「うん、そうそう。あの脚がいいんだよ、脚が。なんていうか、踏

まれたいって思わない？　どうして彼方にはあのよさがわかんないのかなぁ」
「そういうよさはわかんねぇよ……いや、美人だなーとは思うけどさ」
悠人は、黙ってさえいれば線の細い美少年といった印象なのだが、いかんせん明け透けすぎるところがある。考えがフィルターを通らずに直接口から出てしまうタイプというか。
しかし、普段はそういうところをまったく見せないので、真実を知らない支援者養成科の女の子たちにはずいぶんと人気があるのだった。……そのことについて、まるで詐欺のようなやり口だと、俺は常々思っていたりする。
まあ、そうは言ってもこいつは顔だけじゃないけど。
高乃原学園の校風は完全な実力主義だから、外見だけでは人気なんて集らない。人気があるということは、つまり実力もかねそなえているということだ。
俺はふと目についた手近な木の根もとに座り込むと、＜獅子王拳＞のインタビュー記事を読みながら――その前に、スノウリアのグラビアでちょっと手が止まったのは内緒である――自分とは比較にならないほど優秀な友人について、つらつらと考えを巡らせた。
悠人は、二年生で唯一、パートナーの補助を受けずに装化できる期待の星だった。装化補助が必要でないせいか、パートナーはまだ決めていないみたいだが、悠人のパートナーに立候補している支援者養成科の女子は思い出せるだけでも十人以上いるし、もちろん教師陣からも将来を期待されている。つくづく俺とは正反対なやつだ。俺が勝っているのは背の高さくらいか。
しかもカッコイイんだよなぁ、悠人の＜鎧装＞……真っ白で、いかにもヒーローって感じだし……どうせだったら俺もああいう＜鎧装＞がいいなぁ……
「ところでさ、格闘術の授業で武中くんに一発入れたらしいね」
隣に座った悠人がいきなりそんなことを言い、俺はぎょっとして

現実に引き戻された。
「うわ、もしかしてけっこう広まっちゃってるのか？」
「そりゃもう。彼方は悪い意味で有名だし。――あと、そのことが原因で武中くんとパートナーの女の子が喧嘩しちゃったらしくて、みんな楽しそうに噂してる」
最悪の答えをさらっと返してくる悠人に、理不尽な怒りを感じないでもない。
「あー、まずいなぁ……絶対恨まれてるよ、俺……」
「だろうね。さっきトレーニングルームで武中くんを見かけたんだけどさ、一生懸命なにかやってるみたいだったよ。顔つきは……正直あんまりよくなかった、かな」
それはきっと報復の準備かなにかをしているのだと思われる。ほとぼりが冷めるまでは辛い毎日になりそうだった。
「まあ、そんなことはどうでもいいんだけどね」
「よくねぇよ！　学校くるのなんか嫌になっちゃったよ！」
「んー、そっちはそっちで頑張ってもらうとしてさ。……実際どうなの？　最近の調子とか」
不意に痛いところを突かれて言葉につまる。俺のことを気づかって遠回しな表現になってしまっているけれど、悠人が聞いてきた”調子”とは、間違いなく装化についてのことだ。
「……もうちょっと待ってくれると、助かる」
いつか俺が装化できるようになった時、どちらが強いか本気で試そう――そんなことを最初に言い始めたのは、俺だったか、それとも悠人だったか。どちらにせよ、待たせているのは俺だった。
「別にいいってば。どうせここまで待ったんだし、僕はいくらでも待つよ」
曇りのない笑顔でそう言った悠人に、素っ気ないふりで「おう」と答えながら、ここにもひとつ果たすべき約束があるのだと実感する。頑張らなければいけない理由がたくさんあって、そのせいで時には頭を抱えたくもなるが、それはきっと悪いことじゃない。理由

の数だけ意味があるのだと思えば、それはきっと嬉しいことのはずだ。
「こっちこそいきなり嫌なこと聞いてごめん……というわけで話は変わるけど、＜獅子王拳＞のインタビューどうだった？　ヒーローの条件とは、みたいな質問に答えるところがあったでしょ？　僕から言わせるとそういうのって人それぞれだと思うんだよね。彼方もそう思わない？」
「うおっ、勝手に話を進めるな！　まだ読み終わってねぇよ！」
しばらくの間、俺たちは『ＨＥＲＯ' ｓ』を読みながら、悩みを残らず頭の片隅に追いやって、くだらない会話を繰り広げた。どのヒーローがお気に入りだとか、最近のアイドル系ヒーローは云々だとか、そういう話である。
そして雑談が一通り終わると、悠人はあっさり立ち上がった。
「んじゃ、僕そろそろ帰るね。――あ、ヘンなことしてスノウリアのグラビア汚さないでよ？　永久保存するんだから」
「ヘンなことってなんだ……」
俺があきれた声でそう言うと、悠人は楽しそうに、あはは、と笑って、木々の向こうに歩き去っていった。せっかく顔はカッコイイのに……いまいち残念なやつだよなぁ、あいつ。
悠人の背中が見えなくなると、俺は気持ちを引き締めるために一度だけ大きく息を吐いた。
さて、練習再開といきたいところだけど、そろそろ時間も気にしなくてはいけない。連絡もなしに帰るのが遅くなると怒られるので、雑誌をしまうついでに、鞄の中に入れておいた携帯電話のディスプレイを確認しておくことにする。
そこに表示されている時刻を見るなり、俺はきょとんと目を丸くした。いつの間にか、けっこう遅い時間になっている。日が沈むまでにはまだ多少の余裕があるものの、もう本格的な練習ができるほどではなかった。
うーん……まあ、いつもより少しだけ早いけど、最後に”アレ”

を試して帰ることにするか。悠人もいなくなったことだし、見られたくないものを試すにはちょうどいいだろう。
そう決めると、俺はふたたび巻き藁の前に立った。
構えは取らずに自然体のまま呼吸を整えつつ、顔の前で合掌する。それから、いつもよりずっと丁寧に＜氣＞を練り、合わせた左右の掌に少しずつ集中させていく。
わずかな狂いもなく左右に同等の＜氣＞を集めなければならないため、精神を極度の緊張状態に保ち続け――いつしか、動いてもいないのに全身から汗が滲み始めた。
そんな試行錯誤の末に、ふと鋭い耳鳴りが鼓膜を震わせる。まったく同一の強さに調整された左右の＜氣＞が共鳴しているのだ。耳鳴りはその証明である。
これでようやく準備が終った。
合掌するのをやめ、左手は前に、右手は腰溜めに構える。そして、わずかひと呼吸ぶんの空白をはさみ――巻き藁に向かって一気に踏み込んだ。
足が地面を踏むより一瞬先に、前に構えた左手が巻き藁に触れる。だが、これは伏線にすぎない。本命はあくまでも右の掌底だった。間髪入れず、巻き藁にそえた左手の上から、引き絞った右の掌底を叩きつける。

その瞬間、耳鳴りが大きくなり――同時にズドンッと派手な衝撃音が響いた。

想定外の一撃を受けた巻き藁が、折れかけて激しく軋みをあげる。けれど、あわやというところで持ちこたえた。
「つ、ぅ……！」
左手を襲った鈍い痛みに思わず呻いてしまう。＜氣＞の制御が完璧ならこうはならないはずなのだが……どうやら、この技が本当の意味で完成するのは、まだまだ先のことになりそうである。

しかし、技そのものは成功と言ってもいいだろう。おかげで、ひとつしかない大事な巻き藁が、危うく真っ二つになるところだった。練習優先ではあるものの、作り直すのはぜひとも避けたいので、そういう意味では技が未完成で本当によかった。

この技は、左右の手に集める＜氣＞が大きくなればなるほど調整が難しくなるため、いまだ全力で打てたことがない。練習を始めてからずいぶん経つのに、今のところ、＜氣＞を半分以下に抑えればどうにか成功する、という程度の完成度だった。……にも関わらず、ここまでの威力を発揮するのだから、完成すればヒーローの”必殺技”としても十分に使えるはずだ。

ひょんなことからこの技を思いついたのは、去年の年末頃のことだった。以来、装化できるようになったら必殺技にしようと、こっそり練習しているのだが、このことは師匠や悠人にも教えていない。なぜなら――必殺技っていうのはそういうものだろう？　簡単に教えたらつまらないじゃないか。それに、自分がヒーローになった時のことを想像しながら必殺技の練習をしているなんて、正直なところ誰にも知られたくない。羞恥心くらいは人なみにあるつもりだ。

――なんてことを考えているそばから、背後で木々の葉がわずかに音を鳴らす。

風のせいだと思いたかったが、明らかにそうではない。はっきりと人の気配がする。そうなると考えられる可能性はひとつだけだった。……悠人のやつ、まるで見計らったみたいに戻ってきたな。もしかしてわざとか？

まあ、わざとにしろそうでないにしろ、誤魔化すのが先決だろう。確かめたわけではないから見られたかどうかもまだわからないけど、とりあえず誤魔化しておいて損はない。

「なんだよ、まだいたの――……か？」

白々しく言いながら振り返った途端、俺はぎくりと身を固めた。

木々の間に立っていたのは、女子の制服に身を包んだ人影……目を凝らすまでもなく、悠人ではない。見覚えのない女子生徒が、驚

いた表情でこちらを見ている。
「ど、どうも……」
空回りする頭が、どうしようもなく間抜けな言葉を口にさせた。
我ながら赤面せざるをえない大失態ではあるが、とにもかくにも
――それが彼女との出会いだった。

第一章：　落ちこぼれのヒーロー　―２―（後書き）

おんなっけが少なくてつまらん。……いや、冗談ですけど。ご感想やひと言などありましたらよろしくお願いします。

第一章：　落ちこぼれのヒーロー　―３―

彼女の背は、俺よりもちょうど頭ひとつぶん低かった。夕刻の緩やかな風に揺れるセミロングの黒髪は絹のようにさらさらで、大きく優しげな瞳からはどちらかと言えばおっとりとした印象を受ける。その雰囲気に似合って、いっそ儚げなくらいに細身だが、痩せすぎているわけではない。身体の線はむしろ、服の上からでもわかるほどにはっきりと女性の丘陵を描いている。制服のスカートからすらりと伸びた足は膝まである黒いソックスに包まれていて、しかし布地で隠されていない太股の肌は抜けるように白くて……今なら悠人の気持ちも多少は理解できそうだ。さすがに踏まれたいとまでは思わないけれど。

「あの……」

「ふぁっ？　――あっ、ごめん」

いつの間にかその女子生徒に目を奪われていた俺は、彼女から小さく声をかけられた瞬間、はっと我に返って反射的に謝った。初対面の女の子を上から下まで舐めるように――いや、神に誓ってそんなつもりはまったくなかったが――凝視してしまったわけだから、これはもう謝るしかない。

彼女としては、突然の無遠慮な視線に耐えかねて思わず声をかけた、というだけのようで、そこから先、言葉は続かなかった。そのせいでさらに落ち着かなくなったのか、彼女はいかにも所在なさそうにもじもじとしている。なんというか、近年稀に見るほどの素晴らしい純朴さだ。

しかし、俺の朴念仁っぷりも負けてはいない。なにせこっちは学園一の落ちこぼれである。おかげで、ここ半年ほどは女子とまともに喋っていないのだ。そんな俺であるから、当然、名前も知らない女の子と流暢に話せるわけがなく、頭の中はすでに九割くらい真っ白になっている。

結局、二人とも黙り込んだまま、ちらちらと視線を交わすだけになった。
うおお……な、なんだこの状況……すげぇ気まずいっ……
彼女には大変失礼なのだが、たとえるなら罰ゲームでも受けているかのようだ。このままでは精神が崩壊しかねないと判断した俺は、玉砕覚悟で話題をふってみることにする。
「あー……こんなところに、なにか用でも？」
おずおずと、しかもあまり芸のない言葉だったが、それなりの効果はあったらしい。彼女は一瞬だけ戸惑いを見せてから、すぐにふわりと表情を緩めた。お互いに似たような心境だった、ということだろう。沈黙を終わらせるきっかけがなくて、きっと彼女も困っていたのだ。
「いえ、用があったわけじゃなくて、わたし、学園の中をあちこち探け――見学している途中なんです。ここにきたのは、ただ物音が聞こえたからで……あの、練習の邪魔でしたか？」
「えっ、うわ、邪魔とかそういう意味じゃないから。ほら、ここってなにもないし。だから、どうしてだろうなー、とか」
いきなり謝られてしまい、俺はしどろもどろになって首を横に振った。清涼感のある彼女の声とそれを紡いだ薄桃色の唇になぜか強い焦りを覚え、自然と早口になっていた。
ともかく、どうにか会話の取っ掛かりはできたわけだ。この機会を逃せば罰ゲーム状態に逆戻りなので、強引にでも話を続けないと――俺は頭を全力で回転させ、まだわずかな彼女との会話の中に使えるキーワードがないかと考えた。
そこでふと奇妙なことに気づく。
彼女は、なぜ今さら学園見学なんてことをやっているのだろうか。六月になり衣替えも終わったこの時期は、たとえ新入生であってもそろそろ学園に慣れてくる頃のはずで――さらに言うなら、彼女の制服に縫いつけられている高乃原学園のエンブレムは、二年生の学年色である黄色で縁取られていた。つまり彼女は俺と同学年なのだ。

そんな彼女がわざわざ学園を見学する理由なんて、さっぱり思いつかない。
まさか記憶を失ったわけじゃないよな？　いや、ないない。それは絶対にない。
「あのさ、見学って……どういうこと？」
「はい？　――ああ、普通に考えたら、この時期に見学なんておかしいですよね」
首を捻りながら尋ねると、彼女はすぐにこちらの聞きたいことを理解してくれた。話が早くて助かる。
「わたし転入生なんです。実際に通うのは明日からですけど」
へぇ、だから学園が珍しいんだ……って、ちょっと待った。
「転入っ？　ここ、そんなことできるのっ？」
驚きのあまり、思ったことがそのまま口をついた。――この学園では、普通の学校で学んだことがほとんど役に立たない。転入してきたところで授業についていくのは難しいだろう。それがわかっているから、転入生だと言われてもにわかには信じられず、ただ戸惑うばかりだった。
俺のそんな反応を見ながら、彼女は手品の種明かしをするように、くすりと笑った。
「制度はあるのに、ほとんど前例がないそうですよ。だから知っている人も少ないみたいです。えぇと、転入するには外部の”スクール”に通った実績が二十ヶ月以上必要で……あとは有資格者の推薦状さえあれば、いつでも試験を受けられます」
彼女が言っている”スクール”とは、能力者を対象とする学習塾、もしくは道場のようなものである。主催者はもちろん、ライセンスを持ったヒーローやパートナーたちだ。――スクールに通った経験がない俺でもその程度の知識はあったが、スクールで学ぶことが転入の条件になっているとは知らなかった。というか、転入生でもなければそんなことは知らないに決まっている。
そうか……彼女、本当に転入生なんだな。

こうして転入できたのだから、彼女もどこかのスクールに通っていたのだろう。推薦状の出どころは、きっとそのスクールの主催者に違いなかった。どうやら彼女はずいぶんと優秀らしい。そうでなければ推薦状なんてもらえるわけが――

いや、なるほど。だからこそ推薦状が転入の条件になっているのか。推薦状をもらえるほどの人材なら、転入後の授業にもちゃんとついていけるはずだし。そう考えると、けっこう理にかなった条件なのかも知れない。

俺がそうやって一人で納得していると、彼女は突然なにかに気づいたように「あっ」と声をあげた。

「ごめんなさい。わたし、名前も言わずに色々と喋ってしまって――はじめまして、秋月朋恵です。明日から支援者養成科に転入することになっています」

そういえば、まだ自己紹介をしていなかったっけ。話すのに精一杯ですっかり忘れていた。彼女に言われるまで思い出さなかったということは、彼女よりも余裕をなくしていたということだ。あーもう恥ずかしい。

「日野原彼方です。よろしく。……同級生みたいだし、敬語じゃなくてもいいよ。初対面の相手にいきなりそんなこと言われたって困ると思うけど」

同じことを言われたら、たぶん俺だって困るもんな。そう思って気を使ったつもりだったのだが、言葉を受け取った彼女の素直さはこちらの想像を遥かに超えていた。

「あ、えと……うん、ありがとう。できるだけ頑張ってみま……みるから。よろしくね、日野原くん」

恥じらいの見え隠れする口調で返されて、思わず声を出せなくなってしまう。

なんか青春って感じだなぁ。たまにはこういうのも悪くない――というか、むしろイイぞ！？　なんかわくわくするっ！

そんなふうに内心で浮かれていると。

「日野原くんは、もしかしてヒーロー志望なんですか？」
唐突に答えづらいことを聞かれて、のぼせ上がった頭がまるで冷や水を浴びせられたようになる。なにも考えられなくなり、秋月さんが早くも敬語に戻ってしまっていたけれど、そんなことにさえ気づけなった。
「う、ん……一応は、そうなんだけど……」
俺は、今ちゃんと笑えているだろうか。
「やっぱり！　さっきの、すごかったです！　あ、見ちゃダメだったのかも知れないですけど、ちょうど見ちゃって……」
ここにいるのは学園一の落ちこぼれなんだよ――言わなきゃいけないそのひと言が、喉もとでグッとつかえる。無邪気に瞳を輝かせている彼女の期待を裏切りたくなかった。明日になればどうせ全部わかってしまうのに、本当のことを知られるのが怖くて口をつぐんだ。
……そろそろ潮時ということなのかも知れない。
正直なところ、まだまだこうして話していたいのだけれど、嘘つきになりたくないならお喋りはこのあたりで終りにすべきだ。そうしないと、このまま際限なく彼女をだましてしまう気がする。そんなことは絶対にしたくなかった。
「まあ、そんなにすごいものでもないよ。ただの練習だから。――えっと、俺はそろそろ帰ろうかと思うんだけど、秋月さんは？　もうちょっと見学していくの？」
無理矢理に話題を変えたのがわかったのだろう。秋月さんは一瞬はっとなり、叱られた子犬のような顔をする。
「あの、わたしやっぱり邪魔だったんじゃ……」
「そんなことないってば、ホントに。ちょうど帰るところだったんだ。遅くなると過保護な師匠が心配するしさ」
俺は笑いながら首を振った。嘘ではなかったから自然とそうできた。
「そうですか……えと、ならよかったです」

秋月さんはまだどこか納得できていないふうだったが、とりあえずそういうことにしておこうと割り切ったようで、ぎこちなさを残しながらも微笑みを浮かべる。
そして彼女はわずかに考えるそぶりを見せると、「わたしもそろそろ帰ろうと思います」と言った。もともとこんな時間まで学園にいる予定ではなかったそうだ。なので彼女もあまり遅くなるわけにはいかないらしい。
「ここからだと校門はどっちにいけばいいんでしょう？　この学園、思っていたよりもずっと広くて、その……」
「ああ、わからなくなっちゃった？　だったら校門まで一緒にいこう。準備するからちょっと待って」
この林から校門までは、ほんの数分程度の距離しかない。そのくらいなら一緒にいても問題ないだろうし、なにより困っている秋月さんを放ってはおけないし、ここは送っていくのが正しい選択だろう。
――というのは、ただの建前である。
同世代の女の子とこんなふうに話すのは本当に久しぶりだから、いくら頭でよくないとわかっていても、すぐに終わらせてしまうのはやっぱり惜しいのだ。
そんな勝手すぎる考えを我ながら気恥ずかしく感じつつ、俺は近くに放り出してあった学園指定の鞄を開け、中にあったタオルを手に取ると、急いで練習後の汗を拭き始めた。あまり待たせたくないから簡単にすませよう。
「ところで師匠というのは……？　日野原くん、今からスクールですか？」
せかせかと顔を拭っている途中、不意に秋月さんがそんなことを尋ねてきた。
スクール？　――ああ、そうか。普通はそう思うよな。
タオルを動かすことに一生懸命だった俺は、ぼんやりと独り言のように答える。

「いや、スクールに通ってるわけじゃなくて、師匠と一緒に住んでるんだよ。内弟子ってやつ、なのかな」
「えっ？　内弟子……す、住み込みで習ってるんですかっ？」
すぐに、しまったと思って彼女を振り向いたが、もはや手遅れだった。秋月さんはさっきよりも瞳をきらきらとさせ、まるで本物のヒーローと出会ったかのように俺のことを見つめていた。なんだか取り返しがつかないくらい誤解されてしまった気がする。確かに、内弟子ってところだけを聞くと、まるで俺が才能のあるすごいやつみたいだもんな。
「すごいです！　あのあの、日野原くんはどなたのお弟子さんなんでしょうかっ？」
興奮しているらしく、秋月さんの口調は元気いっぱいだった。意外とこちらが地なのかも知れない、なんて暢気なことを思いながらも、一方ではどう答えたものかと頭を悩ませる。
「えー、あー……自分から言っておいてなんだけど、そのあたりは秘密ってことでいいかな。そこそこ有名な人だから、できるだけ言わないようにしてるんだ。俺さ、あんまり出来のいい弟子じゃないし」
そう答えた途端に、秋月さんはしゅんと身を小さくした。
「あ……ご、ごめんなさい。わたし、さっきから余計なことばっかり……」
どうやら質問されるのを嫌がっているように聞こえたみたいだが、すべて本当のことなのである。実際に、この学園で師匠の素性を知っているのは教師たちと悠人だけだ。
なんにせよ、秋月さんはなにも悪くない。
「まあ、そんなことを気にしてるのは俺だけで、師匠自身は『どうして師匠を自慢してくれないんだ！』とか言ってるけど」
俺がわざとらしいくらいに明るい声でそう言うと、秋月さんはきょとんと目を丸くしてから、やがて楽しそうに笑った。
「ふふっ、面白いお師匠さまなんですね」

「……面白いっていうか、子供っぽい人なんだよ。すごく」
喋っている間に汗を拭き終えて、用のなくなったタオルを鞄にしまう。そのかわりに携帯電話を取り出すと、制服の胸ポケットに突っ込んだ。ようやく準備完了である。
「お待たせ。んじゃ、いこうか」
「はい」
鞄を肩にかけながら秋月さんをうながすと、彼女は、先導する俺の数歩後ろを静かについてきた。
やがて林を抜けた俺たちは、だだっ広いグラウンドを横目に、人気のない放課後の学園をゆっくりと歩いていく。この頃になると、二人の間に漂っていた居心地の悪さはずいぶんやわらいでいたので、会話はそこそこに弾んだ。……けれど、秋月さんは相変わらず俺の後ろにいる。なぜだか隣にならぼうとする気配がまったく感じられない。うーん、ちょっと喋りづらいんだけどな。
もしかして俺とならんで歩くのを敬遠しているのだろうか、なんて落ち込みかけたが――そうなる直前に、ぴんとくる。
これはひょっとすると、”夫の三歩後ろをついていく”というやつか？　夫どころか彼氏ですらない俺がそんな表現を使うのはどうかと思うが、ともかく、彼女はどうやらわざとそうしているようだった。
秋月さんって慎み深いというかなんというか……反応の一々がなんとも新鮮である。なにをどうすれば、こういう女の子になるんだろう。
くだらない好奇心を抑えられずに色々と尋ねたところ、秋月さんは驚くべきことをさらりと口にした。なんと彼女は今まであの白峰女子学院――通称”峰女”――に通っていたらしい。峰女といえば全寮制の超お嬢様学校じゃないか。
白峰女子学院は、髪の毛ほどの隙もない鉄壁の女子校で、幼稚舎から大学までの一貫教育を方針に掲げている。普通授業の他にも、立派な淑女となるための様々な特殊授業があり、数十年前には”花

嫁学校”なんて呼ばれたりもしていた……とかなんとか、以前、悠人から聞いた覚えがある。秋月さんは、そんな場所に小学生の頃から通っていたそうだ。丁寧で柔らかな口調も、さりげない心遣いを含んだ所作も、きっと白峰女子学院の淑女教育から学んだに違いない。

彼女みたいな女の子と喋るのはもちろん今日が初めてだが、話題に困ることは一切なかった。出会ったばかりの二人には、そもそも話題を選択する余地がない。共通の話題といえばヒーロー関係のことくらいなので、会話は自然とそういった内容になり、おかげでとても気楽に話ができた。まるで悠人と話しているみたいな感覚だった……なんて言ったら、いくらなんでも秋月さんに失礼だろうか。

ちょうどそんなことを考えていた時に、胸ポケットの携帯電話から、メールの受信を知らせる短い着信音が響いた。

「あ、ちょっとごめん」

秋月さんにひと声かけて、携帯電話を操作する。

俺の携帯電話に連絡してくるのは、悠人か師匠くらいのものだ。相手が悠人であれば、どうせろくでもないメールに決まっている――おおむね女性の前では説明することさえ困難なメールだったりする――ので、放っておいてもまったく問題はないが、もし師匠だったら……まあ、その場合でも八割くらいはろくでもないメールなのだけど、緊急の連絡である可能性だってなくはない。だから相手と用件くらいは念のために確認しておく必要がある。

そう思ってわざわざメールを開いたわけだが。

メールの送り主は悠人でも師匠でもなく……無機質な、ただのニュースメールだった。

ヒーローを志すなら、世の中に対する知識を多少なりとも身につけるべきだ――これは”始まりのヒーロー”と呼ばれる英雄、＜九番目の神兵＞ノインシュヴェルツェの言葉である。俺はその言葉に感化されて、一日に二回、最新ニュースがメールで通知される無料サービスに加入しているのだ。

なんだか肩透かしを食ったような気持ちになりながらも、そのままニュースメールの内容を流すように読んでいく。もしかしたら秋月さんとの会話に使えそうなネタがあるかも知れないし、なんて軽い気持ちだった。

しかし、メールのちょうど真ん中あたりに書かれていた内容を目にして、その瞬間、浮ついた頭が一気に冷える。

「あの……どうか、したんですか？」

秋月さんのちょっと怯えた声が聞こえ、俺はぎくりとして現実に引き戻された。後ろを歩いていたはずの秋月さんがいつの間にか隣にいて、不安そうにこちらを見つめている。そこでやっと自分の顔がひどく強張っていることに気づいた。

「ああ、ただのニュースメールだったんだけど……また”死神”だってさ」

無理矢理に表情をほぐして、どうにかそう答えた。完全には取り繕えず、苦い声になった。

「死神――あ、＜黒の死神＞ですか？」

「……うん、そう」

＜黒の死神＞とは、最近、世間を騒がせている装化能力者――いや、装化犯罪者の通称である。目撃証言から、そいつは漆黒の＜鎧装＞を纏っていることが明らかになっていて、＜黒の死神＞とはそこからつけられた呼び名だった。

＜黒の死神＞は、どこからともなく犯罪者の前に現れて、その命を情け容赦なく奪っていく。相手がたとえ未成年であろうと暴力団の構成員であろうと、そして装化能力者だろうと、＜黒の死神＞は一切の区別をせずに、狙った犯罪者の息の根を止める。死神の手から逃れて助かった者は、今のところ一人としていない。まるで都市伝説のようにも聞こえる話だけど、実際に去年の夏あたりから被害が何件も出ている。＜黒の死神＞によるものと思われる死者は、すでに二十人を超えていた。

現代社会において、法により裁かれるべき者が様々な理由から罪

を逃れてしまうことは多々ある。少なくとも俺はそう感じているし、他にもたくさんの人々が同じことを思っているはずだ。
装化能力者の暴走事件――いわゆる”装化災害”が、そのいい例だろう。装化能力者の暴走によって死者が出ても、法的には過失致死に近いものとして扱われる。暴走時の装化能力者には理性がないため、その間の行為については責任を追求できないのだ。たとえ人を殺害しても、問われるのは能力の管理責任だけである。しかし、被害者の家族や友人たちがそれで納得するわけはない。きっと俺だったら納得できない。
装化災害に限らずとも、似たような事例は枚挙にいとまがなかった。そのせいか、インターネットの掲示板などでは＜黒の死神＞がダークヒーロー扱いされていたりもするが――その気持ちはよくわかるのだが――＜黒の死神＞がやっていることは、結局のところ、ただの人殺しにすぎないのだ。
当然、ヒーローたちや警察の能力者犯罪対策部署は、その威信を賭けて＜黒の死神＞を追っているが、手がかりさえもつかめないままに、そろそろ一年が過ぎようとしている。わかっているのは犯人が装化能力者であることだけだ。死神の正体は、まだ死神本人しか知らない。
「――どんな人なんでしょうね」
まるで俺の思考を読んだかのようなタイミングで、秋月さんが呟いた。
「え？」
「きっと……最初から死神になりたかったわけじゃないはず、ですよね」
なにか理由があるに違いないと、言いたいみたいだった。
もしそうだったとしても道を選ぶのは自分自身である。その責任からは誰も逃れられない。そんなことは秋月さんもわかっているはずだから――彼女はおそらく信じたいだけなのだろう。人間の優しさとかそういう綺麗なものを、疑いたくないだけなのだろう。

それはとても正しいことのように思えたから、俺はただ頷いた。
「うん、そうかもね」
そんなことを話している間に、いよいよ校門が近づいてくる。距離はもはや十メートルもなかった。残された時間があとわずかだとわかり、少しだけ寂しい気持ちになる。
しかし、そのまますんなりとは終わらなかった。
そろそろお別れかぁ、なんてことを思ったのと同時に――
「あっ……」
悲鳴にも聞こえる声を漏らして秋月さんが立ち止まる。
「？　どうしたの？」
尋ねながら彼女の視線の先に目をやると、そこには一台の黒い車が停まっていた。
その車はまるで身を隠すかのように、校門の脇にあるわずかなスペースにぴたりと車体を滑り込ませている。こんなに近づくまで気がつかなかったのは、どうやらそのせいらしい。不審なところは、窓のスモークがきつすぎて車内の様子が外から見えないことくらいだろうか。あえて言うなら、こんな場所に停まっている時点でちょっと怪しくはあるけれど……それにしたって、驚いて立ち止まるほどのことではない。
考えるよりも、秋月さんに理由を聞いたほうが早そうだ。
「えーと、あの車がそんなに気になる？」
すると彼女は気まずそうに顔を伏せた。
「あれ……わたしの家の、車なんです」
「へぇ、秋月さんの――ええっ？」
いわゆるノリツッコミを決めながら、あらためてその車を観察する。正確な車種はわからないが、かなり高級そうな車だった。
うわ、あんなのが自家用車なのか。峰女に通っていたと聞いた時にも思ったけど、秋月さんってイイトコロのお嬢様なんだなぁ。まさか運転席から執事さんとか降りてきたりして……
しかし、その期待はあっさりと裏切られることになった。

「は？」
目の前の光景があまりにも予想外すぎて、間抜けな声がぽろりと零れる。
どんな人が降りてくるのだろうと内心わくわくしながら車の様子を窺っていると、運転席と助手席から二人の男たちが降りてきた。どちらも人相が悪くて体格がよくて派手なシャツを着ていて、しかもゴールドのアクセサリーがいたるところにジャラジャラと――とにかく、そういう”いかにも”な男たちだ。……彼らはどうして周囲を警戒するように後部座席の周囲を固めているのですか？　誰かに狙われる心当たりでもあるのですか？
言葉を失っている俺を置き去りにして、男たちに守られた後部座席から、さらにもう一人、黒いスーツ姿の男が姿を見せる。
先に降りてきた男たちとは違って体格がいいわけではなく、服装もどちらかといえば地味な、一見すると普通の男だった。ナイフを思わせる鋭角の顔はけっこう整っていて、そこだけに注目すれば、優男だと言ってしまってもまったく問題はない。――しかし、頬のあたりに大きな傷があり、そのせいか彼から漂ってくる凄みと威圧感は桁違いだ。周囲の反応から見ても、その男こそがリーダー格であるのは明らかだった。
黒いスーツの男を筆頭とする彼らは言葉もなく校門の前に立ち、こちらを待ち受けている。地獄の門番もかくや、という状況だった。とてもではないけれど足が前に進まない。
あはは、なんだこれ？
「もう……絶対にこないでって言ったのに……」
「え？　あっ、ちょっと、秋月さんっ？」
秋月さんは不意に小さな声で呟くと、立ち尽くしている俺の横をすり抜けて、躊躇いもせず男たちに近づいていった。投げかけた声は届くことなく空気の中に消える。
「ああ……」
秋月さんの背中に向かって思わず呻いた。彼女がいってしまった

以上、自分だけが立ち止まっているわけにはいかなくなり、仕方がないので事情もわからないまま彼女についていく。
校門に近づくと、男たちはそろって秋月さんに頭を下げた。そしてスーツの男が一歩前に進み出てくる。
「お疲れ様です。……社長が心配していましたよ」
「ごめんなさい。どうしても学園を見学したくて」
一般人とは思えない迫力を纏った黒いスーツの男に、秋月さんは臆する様子もなく落ち着いた声で答えた。その姿はとても凛々しく、堂々としていて――あれ？　秋月さん、なんか顔がおっかなくない？
「ところで……」
秋月さんの態度から微かな違和感を感じたのと同時、挨拶を終えた男が鋭い目でひたりと俺を見据えた。ただそれだけで違和感など残らず吹っ飛んだ。
「お嬢、こちらは？」
きゃー、話の矛先が俺にー。
「日野原さんです。見学の途中で知り合って、迷っていたわたしをここまで送ってくださったの」
スーツの男は低い声で「そうですか」と頷くと、ゆっくり俺に向き直って深々と頭を下げる。
「弥栄と申します。社長から朋恵お嬢の世話役を任されている者です。本日はお嬢がお世話になりました」
「ぜ……全然そんナことないでスヨッ！」
怖すぎて見事に声が裏返った。とても礼儀正しいのが、なおさらおっかない。
「本来ならオヤジ――いえ、社長から直接お礼を言わせていただくのが筋かとは思いますが、ここはひとつ私からで勘弁してやってください」
「いえいえいえいえっ、お気になさらず……！　あはは、社長さんともなればなにかとお忙しいでしょうしっ！」
たとえ忙しくなくても会いたくない、とは言えかった。

「はは、日野原さんが今なにを考えてるか、なんとなくわかりますよ。当てましょうか？」
激しく怯える俺に、弥栄さんは傷のある顔で笑って見せる。そうすると多少は愛嬌のある顔になったが、悪いけど焼け石に水だった。
「我が社は”そういうところ”ではありませんから安心してください。秋月建設という普通の土木建設会社です。商売柄、威勢のいい社員ばかり集っていますから、よく勘違いされてしまうんですが」
え？　ただの土建屋さん？　そうなの？　……そのわりに目が笑ってないのはなぜ？
弥栄さんから目を離して他の男たちを見てみると、彼らは厳つい顔でにこりと笑い返してきた。にこり、というよりも、にごり、って感じだ。いや、怖いからなそれ。
「私自身もこの通りの人相ですが、この傷はまだ若かった頃に現場で少々ヘマをやった時のものなんですよ。若気のいたりと言いますか」
現場……それは建設現場という意味ですよね……？　殴り込みの現場じゃないですよね……？
「まあ、建設関係の他にも副業のようなことを少々やらせてもらっていますが、そちらは企業秘密ということで」
秘密の副業って、その時点で普通の土建屋さんじゃないだろ……秘密にしないとマズイものでも売り捌いているのだろうか。
「どうでしょう。わかっていただけましたか？」
「え……あ、はい、まあ……」
我ながら曖昧な返事だった。
「――弥栄っ！　いい加減にしてっ！」
「うわっ！」
俺と弥栄さんの噛み合わないやり取りを遮るように、横からいきなり秋月さんの一喝が飛んだ。たぶん弥栄さんに向けたものだったのだろうが、悲鳴をあげたのは俺だった。
「弥栄……わたし、こういうことはしないでって言ったよ。お願い

だからそっとしておいて、って」
俺にもわかるくらいに秋月さんが怒っている。身体の芯を凍えさせるような、静かな怒りだった。
お、おっかねぇ……！
マネキンのごとく身体を硬直させる俺とは対象的に、弥栄さんは表情をぴくりともさせず、あくまで平然と一礼する。
「申し訳ありません。ですが、これも私の役目ですから。――さあ、そろそろいきましょう」
弥栄さんは冷えた声でそう言うと、相手の反応を待つことなく車に向かった。その間、秋月さんは悔しそうに唇を噛み、ずっと無言のままだった。
「あ、あの……秋月さん？」
「……」
俺がおずおずと声をかけると、彼女はようやくこちらに振り向いた。けれど、その視線は地面に落ちたきり動かない。きっと顔を見られたくないのだろうが――どんな顔をしているのかは簡単に想像できる。
やがて聞こえてきた声は、今にも消えてしまいそうなほどに弱々しかった。
「……怖がらせて、ごめんなさい」
「あ、いや、そんなことは――」
俺がぐだぐだと言葉を選んでいる間に、秋月さんはくるりと踵を返して、小走りに俺から離れていった。呼び止めることもできず、その小さな後ろ姿を眺めながらぼんやりと考える。
……まさかこんな終わりかたになるとは思ってもみなかったな。
大いに不本意な最後だったが、もしもそのままなにも起こらなかったら、俺はきっと黙って彼女を見送ったはずだ。そして後悔していたに違いない。
しかし、そうはならなかった。彼女が車に乗り込みかけたところで、偶然わずかに目が合い――そこに寂しそうな色が浮かんでいる

のを見つけてしまう。
その瞬間、胸がズキリと疼いた。まるで火が点いたみたいに感情が燃えあがる。
こちらを見ているのは秋月さんだけではない。彼女の後ろに立っている弥栄さんも、なにかを見極めようとしているかのような鋭い目で、じっと俺のことを見ていたが――だからどうした。どうせ明日には落ちこぼれだってわかって終わりなんだ。こうなったら今日のことなんて知るものか。
「秋月さん！」
「あ……は、はいっ！？」
後部座席に腰を降ろす寸前、秋月さんは俺の声に驚いて跳ねるように顔をあげた。
そこではたと気づく。なにを言おうか微塵も考えていなかった。勢いにまかせて声をかけたはいいものの、ここからどうしたらいいんだ。
「えぇと……また明日、学校でね」
結局、口から出たのは他愛もない言葉だったけれど、それでも秋月さんは輝くような笑顔を弾けさせた。
「は、はいっ。また明日っ！　よろしくお願いしますっ！」
言ったこちらが謝りたくなるくらい嬉しそうに、彼女は何度も手を振りながら車に乗り込んでいく。後ろにいる弥栄さんが穏やかな表情でこっそりと俺に頭を下げたが、そのことにはちっとも気づいていないみたいだった。
ああ、よかった。明日のことを考えると頭が痛いけど……やっぱり別れはこうじゃなきゃいけないと思うのだ。
秋月さんの無邪気な笑顔に頭をやられて、俺はすっかりダメになってしまった。いつの間にやらふらふらと手を振り返していたらしいが、それを自覚したのは車が走り出した後である。
俺は、夕日を浴びながら遠ざかっていく車を最後まで見送り――それから、火照った頭にふと浮かんだ言葉を、なんとなく呟いた。

「……いい子だなぁ」
なにはともあれ、そういうことのようだった。

第一章：　落ちこぼれのヒーロー　―３―（後書き）

まだちょっと修正点は残るものの、とりあえず。……ところで、初めてメッセージなるものをいただきました。嬉しいです。ありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3066e/

装化疾風シルファリオン

2010年10月31日00時44分発行